

# 當道の『妙音講縁起』

——解題と翻字・影印——

鈴木孝庸

## 一 はじめに

本稿は、「當道」(男性盲人の社会保障機構)の文書のひとつ『妙音講縁起』を紹介する。内容は「當道」の由来を守護神と皇室との関係で説き、「妙音講」という年中行事の由来を伝えるものだが、この書が、他の當道資料に比べると独特の記事をもっていることに注目したいと思う。

南北朝期にある程度の形が定まったと推測される「當道」は、特に江戸時代になってから、みずからの集団の拠って来たる経緯・歴史を記し、権威付けを行い、さらに内部規律を定めた文書を数多く作成している。これらの資料は、「歴史」と「規律」を記すことに主眼があるとみてよいが、當道の主たる技藝が平家物語を語ることであったために、語り手の系譜や語り(声)の技法や声の扱い方の精神に関する伝承なども記されている。それらの「當道資料」も採用しながらの、盲人史記述および資料に関する大局的な跡付けは、中山太郎『日本盲人史』(一九三四。昭和書房)『續日本盲人史』(一九三六。昭和書房)、加藤康昭『日本盲人社会史研究』(一九七四。未来社)、森納『日本盲人史考』(一九九三。米子市、今井書店)などで行われてきた。

ところで、當道資料そのものは、書名は様々ながら、互いに近接する本文を共有し、見方によっては、どの資料をみても同じことが書いてあるように思われるほどであるが、単純にすべてを等し並みに扱ってよいのか

どうかについては速断を控え、いましばらく個々の資料ごとの検討作業が必要と考えられる。その必要性についての最初の発言は加藤康昭『日本盲人社会史研究』であるが、私は、それをうけつつ、いくつかの當道資料について、伝本の検討結果を発表してきた。『當道要集』<sup>注1</sup>『當道大記録』<sup>注2</sup>『當道略記』<sup>注3</sup>『當道拾要録』<sup>注4</sup>『四宮殿傳記』<sup>注5</sup>『古式目』<sup>注6</sup>に関するものがそれである。本稿は、こうした作業の続きとして、『妙音講縁起』を取り上げる。

「妙音講」と「當道」との関係は、これまでも言及があるが、近年では、瞽女<sup>こぜ</sup>の年一度の重要な儀式として注目されてきたものの、男性盲人の儀式としてあまり検討されることがなかったと思われる。「當道」においては、二月十六日の「積<sup>つみ</sup>」と六月十九日の「涼<sup>すず</sup>み」という「二季<sup>にき</sup>の塔<sup>とう</sup>」が知られているが、「妙音講」は、『當道要集』や『當道大記録』などに記載がない。しかし、『當道略記』には、

一 京都におゐては 古へより毎年二月十六日積塔 六月十九日涼の塔とて 檢校の上座より一人宛塔人と定 勤行れ候 諸国に於ても 城下郡とも一組宛相集り 毎年妙音講と名付て 勤來るなり

右妙音講之儀は 妙音天の法會計に而も無之候 天下泰平 五穀成就 御武運御長久 皆座繁昌を祈り 又 天夜の尊を始奉り 御代々の異思<sup>（有思）</sup> 別而は東照宮不浅御恵みの御恩徳を感じ奉り 心經陀羅尼等 讀誦可仕候 然る上は 服忌 不浄の火を改 清浄に致し 可致出仕候 必猥に寄合申間鋪事（架蔵本による）

とある。

これによれば、京都における當道の行事が二季の塔であつて、諸国における盲人の参集儀式を妙音講と呼んだもののようである。また、祀られ祈られるのは、妙音天、天夜<sup>（有）</sup>の尊、東照宮であり、技藝の神に祈るだけでなく、天下国家の安泰・豊饒を祈ったものようである。

また、『當道略記』は妙音講に欠かせぬ書であつたらしく、金沢市立図書館蔵の『當道略記』は、外題が「座

頭妙音講に讀聞る秘書」とある。

## 二 『妙音講縁起』

『妙音講縁起』は、『國書總目録』『古典籍総合目録』には、国会図書館の一本の所蔵が報告されているが、他に兵藤裕己と永井彰子<sup>まろ</sup>の紹介がある。国会本と大庭家文書と本稿で紹介する本との関係は後述する。

ここに紹介しようとする『妙音講縁起』は、架蔵の「當道書」（仮称。外題があつたはずだが、現在その題簽が失われている。）の中の當道資料四点中の一点である。本書の書誌は、

○ 冊子本、一冊。縦二四、○糎、横一七、○糎。

浅葱色表紙。料紙、楮紙。袋綴。墨付き四十五丁。遊紙、前一丁、中二丁、後二丁。

外題不明（題簽剥落してなし。痕跡表紙中央にあり）。

内題「當道略記」「御條目」「當道要集」（この「當道要集」の内実は「妙音講縁起」と「當道要集」）。

一筆書写と思われるが、字の大きさ、ふりがなの有無、一行字数、半丁行数などが資料毎に異なる。本来別々に書写したものを一括製本したものか。朱書き入れ等なし。書写は江戸末期か。

蔵書印なし。

で、「妙音講縁起」部分は全五丁である。

『妙音講縁起』は、『當道要集』の冒頭部分に位置して収められていて、この部分に関する内題ナシであるか

ら、『當道要集』を構成する部分と見られるかもしれないが、これまで、私が見てきた『當道要集』（または『當道要抄』）の範囲では、このようないわば「まえがき」をもつものを見ていない。

またこの部分は、書誌に記したように内題なしだが、奥書に相当するものがあり、

右之趣堅可相守仍妙音講縁（マ）記如件（右の趣き堅くあい守るべし。よつて妙音講縁記、くだんの如し）とある。「妙音講縁起」を書名（あるいは文書名）とみてよからう。

全文の翻字と影印を本稿に付すが、途中の和歌の箇所を改行する他は、全文書き続けになっている。また、當道資料によく見られるような一つ書きではない。

全文を、内容を私的に判断して、十六に分けてみた。

- 01 賀茂大明神、盲人を憐れむ。
  - 02 賀茂大明神、光孝天皇の御子（盲人、雨夜の尊）として誕生。
  - 03 光孝帝、母君、盲人の誕生を嘆く。
  - 04 雨夜の尊、身を恥じて、出家と諸国修行を願うが、免されず。
  - 05 雨夜の尊の夢に、天女（妙音菩薩）が現れ、出家行脚を勧め、琵琶と杖を与える。
  - 06 夢を通じて与えられた、琵琶の形の意味するもの。杖のもつ意味。
  - 07 雨夜の尊、剃髪して内裏を出奔。琵琶を弾じて諸国を廻る。
  - 08 雨夜の尊、諸国廻りで難儀するも、妙音菩薩の助けあり。
  - 09 雨夜の尊、幾年後に帰洛。父帝以下の感歎あり。
- （雨夜の尊）、城一檢校に任じられる。

10 當道の官の尊さ。

11 城一檢校に二人の弟子あり。惣領は八坂の流の祖。次は都方の祖。

12 當道の法式は、天満天神の導きによつて定められた。

13 加茂大明神、妙音弁才天、天満大自在天神は、當道の守護神。  
(寛茂)

14 京都では二季の御祭事、在所の妙音講は、それを真似たもの。

15 城都(麻)檢校は、熊野を信仰した。

16 右のことをおろそかに思う輩には、嚴罰が下るのだ。

右のような内容をもつ『妙音講縁起』は、結局次のようなことを伝えていると読むことができる。

い、當道の盲人は、神および天皇の血筋に繋がる。

ろ、當道の盲人のもつ琵琶と杖は、神よりの授かり物。

は、苦しい諸国廻りも、神の守護がある。

### 三 国会本『妙音講縁起』との比較

前述のように『妙音講縁起』と称する書は、国会図書館の他に数本が報告されている。

国会本は中山太郎旧蔵本ではないかと思われるが、帝國圖書館蔵本としての後補表紙があり、外題が「妙音講縁起(他一篇)」とある。中味は、「妙音講縁(マ)記合卷」として「妙音講縁(マ)記」(十丁)と「妙音菩薩繪像縁由」

（五丁）と内題なしの五丁（『續日本盲人史』一五頁で「座中次第記」の仮称が与えられている。）、これに「座中官途之次第」（十七丁）である。このうちの「妙音講縁記」が、さしあたり本稿に関係する。

国会本『妙音講縁記』も全文書き続けであるが、私的に十九に分けてみた。なお、大庭家文書『妙音講縁起』は、国会本と対校した結果、本文異同がかなりあるもののほぼ同内容構成と考えられる。よって、本稿では、以下国会本に拠って考察を進めることにする。

- ① 神仏の、衆生への哀れみ。
- ② 賀茂大明神、光孝天皇の皇子・古宮太子として生誕。  
盲目のため、勅命で秘法・祈祷を行うも効き目なし。
- ③ 「古宮」の用字。末代の無官の輩の名とのつながり。
- ④ 父帝、太子の成長後、座頭となって諸国一宿し罪業を清めることを命ずる。
- ⑤ 太子、清涼殿にて剃髪し、座頭となる。
- ⑥ 座頭の名の由来。
- ⑦ 太子、妙音弁才天を念ずると、美女（妙音菩薩の化身）が現れ、杖と琵琶を授ける。  
杖の寸法のこと。
- ⑧ 太子、御殿を出て、諸処で一宿。
- ⑨ 座頭の一宿のこと。
- ⑩ 座頭は、賤しきものに近づかないこと。
- ⑪ 太子、諸国で難儀するも、妙音菩薩の加護あり。

- ③ 月日が経って、太子、内裏へ戻る。帝以下の感涙。
- ② 太子の母、太子に官職を与え、太子、城都検校となる。
- ① 座頭の官職のこと。
- ④ 城都検校に二人の弟子あり。惣領は八坂の祖、次は一方の祖。
- ⑤ その後、天満天神も加わって、座頭守護の誓願あり。
- ⑥ 座頭は、神仏への報恩の祭を行う。
- ⑦ 法度式目をおろそかにする者には、天子・神仏の罰が下る。

国会本と架蔵本のテキストを比較すると、まず大枠に違いはないと言つてよさそうである。すなわち、

賀茂大明神と當道との関わり。

琵琶と杖の下賜。

光孝天皇の皇子の諸国めぐり。

妙音菩薩の加護。

皇子が城都検校となる。

その後二つに分派。

天満天神の當道加護。

12 11 09 08 07 05 01  
08 02

q p n l i g b  
l

は、共通する。しかし、異なる点もかなりあり、文章表現も異なるので、どちらかを主にしたとしても、片方

を対校本文に使うにはかなり面倒な作業を必要とする。

比較的近い関係にあるのは、08―①、11―⑩であろう。

08 十善帝の皇子として忽<sup>でい</sup>躰なくも泥土を御足に穢し  
賤き諸民に御手をつかね 諸国を修行ましくける  
に 家里にくる、時は

① 去程に 太子

堂塔 神社に一夜を明し 或時は 情ある人有りて  
家にとゞめ餓<sup>う</sup>へしのかせ奉り 又或時は山家に黒い  
谷坂 細道ひとり橋にかゝらせ給へは 難有も 妙  
音ほさつ 往來の旅人と現し 太子を導き里に出し  
奉り 日も積り月をかさね海河の端に趣かせ給ふ時  
は 釣人と現し 船に棹さし渡し奉る

堂塔神社に一夜を明し 又 或時は情有民家に日を  
暮し 又は山野にまよひ給ふ時は 難有も 妙音菩  
薩 往來の人と現し 太子に道をおしへ無難人里  
へ御出あり 又大海の邊に趣給ふ時は 弁才天 釣  
人となり 慈悲の御舟を漕よせ 太子を乗せ奉り  
難なく岸に上らせ給ふ

11 されは城一檢校に御弟子式人あり 惣領に城の字  
を下され 大山 妙門 関 佐倉 八坂の流 是な  
り 次に都といふ字を下され 師堂 妙觀 戸寫  
源正 都方といふことは也 則式人の御弟子より八  
流となり給ふとかや  
次に、国会本と架蔵本とで異なる点を列挙する。

⑩ かくて 城都檢校 御弟子式人有ける 惣領は城  
の一字を下れ 大山 名門 関 桜 八坂の派 是  
なり 次には都の字を下され 紫道 名官 戸嶋  
現正 一方の派是なり 兩派今八流と成 次第く  
に派付三十三派を定り

i 光孝天皇の皇子の名を、架蔵本は「雨夜の尊」と呼び、10のところで「小宮（こきさう）」の呼称が脈絡不



鮮明で出てくる。国会本では「雨夜の尊」の呼称はなく、「古宮」「古宮太子」である。

ii 架蔵本04の、雨夜の尊が出家行脚を願う条りは、国会本にはない。

iii 盲目の皇子に出家行脚を勧めるのは、架蔵本では「天女（妙音菩薩の化身）」、国会本では「光孝天皇」である。

iv 一連の物語叙述の中に、現在（後代）の座頭の諸種のことからに関する起源ないし説明が挿入されているが、架蔵本と国会本との間で出入りがある。総じて言えば、国会本はその記述が多い。

・琵琶と杖の件は、架蔵本が詳細。

・「小宮」―「古宮」の記述、交際相手の選別の件は、ほぼ同等か。

・㊦㊩㊪は、架蔵本になし。

・座頭の泊まりを特に「一宿」と表現すること、架蔵本になし。

v 熊野信仰の件（15）は、国会本になし。

相対的に言えば、「雨夜の尊」の件、熊野信仰の件の有無は、架蔵本の方が、他の當道資料に近いと言えるだろう。また、現在のことから関わる記述の多寡から言えば、国会本の方が、現実の（京都以外の地の）當道座頭の妙音講の実際の場合に、より接近した内容になっているとすることができるだろう。

#### 四 『當道要抄』などとの比較

『妙音講縁起』は、光孝天皇の皇子・雨夜の尊が登場するので、當道の始祖に関する伝承としておなじみのも

のかと思うところだが、他の當道資料の記述と比べると大きな違いを指摘することができる。以下その点も含めて、異なる点を列挙する。

【その一】雨夜の尊が賀茂大明神の化現ということ

雨夜の尊と光孝天皇の関係は、伝えによっては、親子関係ではなく、兄弟関係だと記すものがあるが、ここではその点の追求に入らぬこととする。『妙音講縁起』では冒頭に、賀茂大明神が盲人を憐れんで、盲人を守ろうとして、まず盲人の姿となって誕生したのだという。これについて、a『當道要抄』（国会図書館、橋本経亮書写本）とb『當道拾要録』（新潟大学蔵）の雨夜の尊の記述は次の通りである。

a：抑雨夜の尊と申は光孝天皇の第一の御子にて渡らせ給ひしか、盲目とならせたまへり：

b：かくて 文徳天皇の御宇 天安二戊寅の年 御とし廿八歳にして 病に愁へさせたまひ 終に御両眼しひて盲人とならせ給ぬ

いずれも賀茂大明神との関わりの記述はなく、しかも後天的な盲人と記しているのである。

【その二】雨夜の尊の諸国行脚

盲人として誕生した雨夜の尊が、諸国修行の旅に出ることも、他の當道資料にはない。他書は、途中失明だが、これもa『當道要抄』b『當道拾要録』でみることにする。

a：或時天帝より仰成けるは 御身を有度まゝに御持有て 何事も思召さまにて 年月を送らせおはしませと 仰られ侍しかは 雨夜の尊の御返事は 我は是盲目にて侍れば 両眼明らか成者に見られ侍る事耻敷侍る也 然は我こづく成盲目を并へ置つゝ、年月を送らまほしく思召すと 御返事侍る間 是安御

事成とて 洛中を御尋有て みめ能姿尋常成盲目をゑらひ出されて 母后より女房を下されて……

b：然れとも御盲人とならせ給ひ御出家の後は 右の人々参りとふらひ奉れ共 御かたちのかはれるを恥おほしめして 對面もし給はす 夫より山城及(マヤ)幾内近國より 筋目よき清らかなる盲人共をめしあつめて御伽となし 四絃 玉笛 催馬楽を盲者共に教へまし／＼て 瞽者ともに四絃をしらへさせ 御みつから御笛を遊はし また有時は 御みつから四絃の秘曲を弾たまひて 瞽者に催馬楽唱はせ朗詠をかなてさせおはします

いずれも、失明後は、身分よく理解ある盲人に囲まれて、藝能に専心する生活を送ったとあり、諸国行脚のなどとはまったく記されていないのである。

【その三】 雨夜の尊すなわち城一（城都） 檢校ということ

これは、平家物語関係の記事としては、奇妙な説というべきだろう。本書は、平家物語についてまったく言及がないが、「八坂」―「二方」に関して、またその前に「琵琶」に関しての言及があるのだから、當道と平家物語の関係は、基盤となっていると考えられる。

その説が事実を伝えているかはともかくとして、當道と平家物語との結びつきは、『當道要抄』で言えば、比叡山の性仏僧正が盲目となつて、山王権現の託宣を得て、平家物語にふしをつけて語り始めたのだと言い、それは四条院の頃（一二三二―四二）だと言う。さらに

一 筑紫方城一と申檢校 後宇多院の御時出来せり 此城一を檢校の開山とす 在名を云事 自是はしまれり 其比 城玄 如一 とて 檢校二人有 二人ともに筑紫方城一の直弟子なり 城玄は八坂方最初の檢校也 如一は一方最初の檢校なるに 城玄の在名は八坂と号す 八坂の塔の辺にすめは也 如一の

在名は坂東と号す 此時八坂方一方と両流に相分る ……

と「城一檢校」のことが出てくる。後宇多院の御時（一二七四—一八七）とあるから、『妙音講縁起』の言う、光孝天皇の皇子「雨夜の尊」が、「城一檢校」になったのだというのは、時代錯誤も甚だしい。しかし、當道あるいは「座頭」を中心とする地方の當道に伝承された「歴史」であつたのかもしれないのである。

そのことは、八坂・一方の二流が、さらにこまかな派に別れたと伝えていることの問題にも繋がる。

以上、従来知られている（あるいは多数派を占めている）當道の歴史叙述とは異なる歴史叙述になっている書として、『妙音講縁起』に注目し、本文の紹介を行うことにする。なお、原文の判読に誤りがあることを惧れる。広く御教示を願う次第である。

注1 「翻刻『當道要集（要抄）』三種」（国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第七号。一九八六、三）

注2 「翻刻『當道大記録』（京都府立総合資料館蔵）」（上参郷祐康編『平家琵琶—語りと音楽—』ひつじ書房。一九九三、一二）

注3 「資料紹介『當道略記』（新潟大学「人文科学研究」第一一〇輯。二〇〇二、一二）

注4 「當道資料の基礎的考察——『當道拾要録』について——」（山田欣二編『巫覡・盲僧の伝承世界第二集』三弥井書店。二〇〇三、三）

三）

注5 「イェール大学蔵の當道資料について——付『四宮殿傳記』翻刻——」（新潟大学「人文科学研究」第一一五輯。二〇〇四、八）

注6 「當道の『古式目』——解題と翻刻——」（山田欣二編『巫覡・盲僧の伝承世界 第三集』三弥井書店。二〇〇六、一二）

注7 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』（吉川弘文館。二〇〇〇、一）第二部第一章「當道祖神伝承考」

注8 永井彰子『福岡県史 文化・民俗編』（福岡県。一九九三、九）に大庭忠雄氏蔵『妙音講縁起』の翻刻がある。

付記 本稿は、平成二十一年度日本学術振興会科研費・基盤研究（C）「平曲伝承資料の基礎的研究」、および新潟大学学系プロ

ジェクト「声と身体に関する比較総合的研究」(代表、高木裕)による成果の一部である。また、日本学術振興会科研費・基盤研究(C)「京都当道座奥村家関連資料の総合的研究」による研究会(二〇一〇年一月二十二日)において口頭発表を行い、岡田三津子氏、櫻井陽子氏より御意見を頂戴した。

# 資料紹介『妙音講縁起』

## (妙音講縁起)

- 01 謹ておもんみるに 佛神 衆生を憐み給ふ事 區々たる中に 分て賀茂大明神 盲人賀護まします事は 父母の子を愛することならず 言葉にも宣へかたく 筆紙にも及かたし 唯 尊を可祈事をや
- 02 抑 當道一宗の起りは 往昔 光孝天皇の御子雨夜の尊は 忝も賀茂大明神の化現にて 末世の盲人を紹介わんと 胎内より御眼しゐさせ給ひて 御誕生まし／＼けり
- 03 此有様を 帝にも御母君にも 深く御歎きまし／＼て 神明諸てらへ御祈誓あり 六十餘<sup>カ</sup>の神職 貴僧 驗者 祈奉るとゐゑとも 本 賀茂明神 盲人濟度の方便なれば さらにそのしるしまさす 帝にも御母君にも ひとしほ御(一オ) いとほしみ不浅 片時も御側をはなち給ふ事なし
- 04 或時 尊 奏し給ひけるは 民官の子にてもあらず ましては皇子たるみの かく目しひて生るゝ事 前生の悪業ふかき事餘あり 庶幾は勅免を蒙り 速に剃髪して 諸国を廻り難行して 罪障を滅して 重ての生を助りたきよし 再三願はせ給へとも さらに御免しまします
- 05 太子せんかたなく思召煩せ給ひ すこしまどろませ給ふ御枕もとに いとやんことなき天女 立現し 君は

賀茂大明神の應化なり すみやかに剃髪を遂け 位を捨て 内裏を出御有り 諸国をめくり 貴賤の隔てなく  
 音曲おんきょくを以て人の心を慰め 末世の盲人（一ウ）の祖として 位を定め 法式を立おわしませ 我則妙音菩薩な  
 り 音曲を導き 末世まで盲人を守護すへし はやく修行に出させ給へと 琵琶一面に よそぞみの杖をまい  
 らせ 御歌に

世の中の人の情をはしとして 渡りめくれやひと泊りつ、

と詠し給ふとおもへは 御夢覺て わたりをさくらせ給へは 琵琶に杖をそへてありけり

琵琶の長三尺五寸にして 五行三徳を表す 四糸は四節をかたとり 内は空にして 桁をわたし 柱をつよ  
 くして 音微妙の（二オ）音律を發す 又よそそみは 木強くそたち直にして 惡鬼を走るなり よそそみはよ  
 つすみともいふなり 盲人も此のことく心すなほにして 邪氣をふくまず 善惡をつよく持つへきたために妙  
 音菩薩より 琵琶と杖と授けさせ給ふとかや 是末代に至る迄 當道のつへ よそそみの木 此因縁なり

太子ありかたく思召して 御跡を三度礼し その後清涼殿にて 御かさりをおろさせ給ひ ひそかに内裏を  
 御忍ひ出させたまひて 諸国を琵琶を弾し音曲して 人を慰め廻らせ給ふも 是當道一宗のはしめ也

十善帝の皇子として 忽でい躰なくも泥土を御足に穢し 賤き（二ウ）諸民に御手をつかね 諸国を修行まし  
 くけるに 家里にくるゝ時は 堂塔神社に一夜を明し 或時は 情ある人有りて 家にとゞめ餓うへへしのかせ  
 奉り 又或時は 山家に黒い谷坂 細道ひとり橋にかゝらせ給へは 難有も 妙音ほさつ 往來の旅人と現し  
 太子を導き里に出し奉り 日も積り月をかさね 海河の端に趣かせ給ふ時は 釣人と現し 船に棹さし渡し奉  
 る

幾年の難行 殊ゆへなくおわして 都に御歸りましますは 帝叡感浅からず 誠に眼しゐたればこそ 一天  
 の皇子たる身の 綾羅錦繡の内裏を捨て 賤き民家に旅宿して 難行をこそしつ（三オ）れと 御衣の御袂を

10 しほらせ給へは 諸卿官女何れも涙をなかし 御難行の御志を感じ奉る 此時御難行の賞として 則城一檢校の官に任せられ すべて當道一宗の祖と御誼あり 是より當道の官はしまる也

凡當道の官は 僧官女官たるゆへ 穢不淨を撰わす 祝儀愁を嫌すとかや 元祖皇子にて渡らせ給ふゆへ 筋なきものゝ下にをらす 縦賤きもの目し<sup>い</sup>みたり共 小宮と名付ぬれば 尊の御流を汲故 その身の品 貴官 濟さる内は こきうといふ文字小宮とかく 太子と同じ心なり 惣して初心たりといふとも 筋目悪敷ものゝ (三ウ) 家に行かす 盃取りかわさゝるも 當道の家に傳る故也

11 されは 城一檢校に御弟子式人あり 惣領に城の字を下され 大山 妙門 関 佐倉 八坂の流 是なり 次になどといふ字を下され 師堂 妙観 戸寫 源正 都方といふことは也 則式人の御弟子より八流となり給ふとかや

12 當道の法式 光孝天皇の宣旨を請て 城都檢校の定置給ふ處 全私にあらず 則天滿天神宮 天にありては 分雷加茂大明神と一躰 分身の御神なる故 菅家の元祖として 廣学秀筆の大臣 一切の諸人 文旨にして誦書ならさるものは盲人に等く 是を教て眼をひらかしめ また(四オ) 盲人には 言葉を以ておしへさとしめ 道をしらしめんとの御誓願なり

13 加茂大明神 妙音弁才天 天滿大自在天神 當道の加護神なり 我前へ百度參んよりは 一度當道へ慈愛をくわへは 永くその者の災難を除き 子孫繁栄に守るへし また我を信するもふ人は 衆人愛敬 福知圓滿 壽命長久 出世成就 未來はたちまち法身の眼をひらゐて 九品の蓮臺に引導せんとの御誓願なり 難有き御恵み 何をもつてか對奉らん

14 古より 於京都<sup>二</sup> 檢校 勾當 二季の御祭事は 廣大無量の御恩報じ奉んためなり (四ウ) 随而 在々うらくの妙音講は 石塔 涼の学なり されは 光孝天皇の御流 城都檢校の傳孫にして 官も職もみな元祖の御

15

厚恩報しても尚あまりあり 仰へしたふとふへし

此事 紀<sub>効</sub>熊野三山の大縁起にもくわしくあり その故は 城都けん校 熊野を御信仰ありて 度々御参籠  
ありし故也 尤當道にて熊野を信じ奉るへきことなり

16

是等の事共をおろそかに奉存輩は 天子の御爵 加茂大明神 北野は申に不及 日本六十餘<sub>効</sub> 大小之神祇  
別而はみやうおん弁才てんの御爵を蒙り その身勿ちに (五オ) 滅せん事 なにの疑かあらんや

右之趣堅可相守仍妙音講縁記如件 (五ウ)



禮ておん足跡小佛神元生我憐之なる事區  
 たり申小方々賀茂大ぬ神盲人賀茂よりなるハ  
 父母子と世もあふなり云云と云々て業  
 紙と及こ一唯言と可なりとや杯當た一家の起  
 ハ信昔光孝天皇は御子る夜の高ハ帝と賀茂大ぬ  
 神の化現とて世の盲人我々をんと胎内より出服  
 ありとて後て御誕生しとていふと帝と云々と  
 沙母君とて常く御款とてして神の法とて御祈  
 祈とあり六十階易乃神職貴信者なりとて  
 是とてなが賀茂の神盲人淋たの方便なきは  
 其のありとて云々帝とて御母君とていふ

いづれみち原行時と例をとりし事なり式時  
 常奏といひたるは氏友の子ふてとわたりし  
 皇子たりみのく目あいて生るる中生の恩業ふ  
 こころ解わく唐衣ハ勅免とあがり速小利髪して  
 法衣を穿つ移りて罪障と滅してまての生を  
 助うた起り一帯之教りせうともいふに法免より  
 すまは太子せんうなく言はせういふこころ  
 せうふけ枕りふいふとるんとて天女立現し  
 い賀茂大の神に應化なりは之とる小利髪は  
 中後縁捨く因縁とあがり法衣とあがり  
 法衣とあがり勅免といふ人の心と慰め来世の身人

(一七)

此祖として倭成定め法式と立わたり師を教ふ妙  
善菩薩なり善世と守る末世よりて吾人より護  
る一と云々修りふあまなりと琵琶一面ふと  
かゝる杖と云ふ縁也

即縁也

世乃中れ人々懐成とて

彼よりこれやと云ふ縁也

と縁なりと有りは師愛元と云ふと云ふと  
彼も琵琶也杖と云ふと云ふと琵琶の長三定  
むすふと云ふと縁也表に師の長三と云ふと  
云ふと縁也と云ふと縁也と云ふと縁也

萬葉と新撰又と必そと本流くそと出かて西  
 照鏡をうなりとも必さうあそみもいれり貢  
 と内の一と必さうあそみもいれり貢  
 とはくちめり金たえふ妙老善權より長徳と  
 扶と極いさせりともやもあ代よりあそみ貢  
 萬葉と新撰又と必そと本流くそと出かて西  
 照鏡をうなりとも必さうあそみもいれり貢  
 と内の一と必さうあそみもいれり貢  
 とはくちめり金たえふ妙老善權より長徳と  
 扶と極いさせりともやもあ代よりあそみ貢

諸氏小多とほは法を修めりてくまに成  
 里より多時八堂増補社小一衆をのりて武時徳の  
 教人として教ふる所職（三）のせなり又武時出家  
 小多い首板細皮部より揚ふりてせり八難を  
 小多は三摩性来乃旅人と現一を我屋等  
 里小出しなり目と移り月我らこ子海の端  
 又移りせり小時八釣人と現一私小押さる  
 小多我ら此難の修めりてくまに成  
 里より多時八堂増補社小一衆をのりて武時徳の  
 教人として教ふる所職（三）のせなり又武時出家  
 小多い首板細皮部より揚ふりてせり八難を  
 小多は三摩性来乃旅人と現一を我屋等  
 里小出しなり目と移り月我らこ子海の端  
 又移りせり小時八釣人と現一私小押さる

まことし衣はけ被哉三つをせりハ法々友女ゆき  
 原とありハ雅ゆの志と感ハなる時ゆ  
 雅ゆの業として城一校校の友ハ紐せらる  
 らて當たり系乃祖とハ流りハモリ當道の  
 友ハ一ゆりハ當道の友ハ偽友女友たりハ  
 縁ハ縁と撰りハ祝儀縁と縁とハ元祖と  
 子ハ子と撰りハ子ハ子とハ子とハ子とハ子と  
 縁ハ縁の目志なりハ小宮と名身縁とハ  
 高れハ高とハ高とハ高とハ高とハ高とハ高と  
 こきハこきハ文字小宮とハ高とハ高とハ高と  
 高とハ高とハ高とハ高とハ高とハ高とハ高と

(三六)



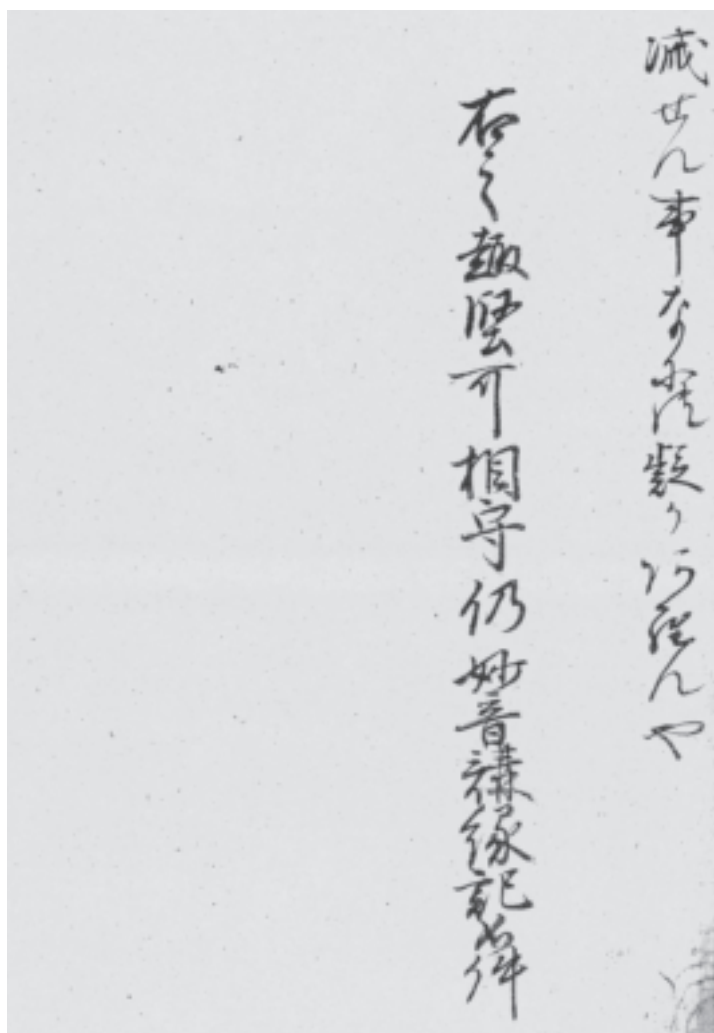






随ひていふらん少き縁に之信縁の学於これ  
 光孝天皇に河内城に授け侍縁に之友  
 と職とみま元祖の河内思強してと尚ほ  
 王の御座りてふと御座りて事紀勢能  
 三山の大縁起とてふと御座りて事紀勢能  
 りん授け能縁河内信縁とてふと御座りて事紀勢能  
 わりて御座りて事紀勢能と信とてふと御座りて事紀勢能  
 及日天子は河内大少と御座りて事紀勢能  
 及日天子は河内大少と御座りて事紀勢能  
 及日天子は河内大少と御座りて事紀勢能

(五才)



(五ウ)